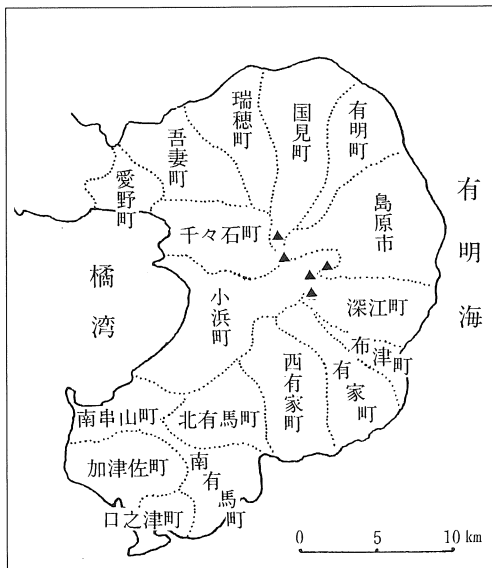


創立50周年を迎えた 長崎県小浜町馬鈴薯採種組合

長崎県種馬鈴薯協会
財団法人いも類振興会



・ 甘しょ作から暖地馬鈴しょの先進地へ

長崎県の南部、島原半島の中央に聳える秀峰雲仙岳を中心として四方にひろがる各市町は温暖な気候に恵まれ、いろいろな農畜産物が生産され、馬鈴しょは重要な生産物の一つとなっています。

半島西部の橘湾に面した小浜町は、昭和30年（1955）小浜町と北串山村が合併して成立しました。面積約52km²、人口1万3千余、昔から漁業とともに農が生業となっていて、現在では県農業の中心地となっている島原半島でも、江戸時代は主として自給用の穀類などがつくられ、土地がかならずしも肥沃でなか

ったためにたびたび飢きに襲われています。救荒作物としての甘しょの試作が元禄4年（1691）、当時の小浜村木指名、羽毛合名で行われたとの記録がありますが、現鹿児島県の種子島への甘しょの伝来は、元禄10年（1697）で、小浜村での試作はそれ以前となりますが、どこから、どのようにして種苗を入手し、また試作の結果はどうであったか、その後普及したかどうか、については明らかではありません。

土地が肥えてなく、台風などの天災にしばしば襲われるこの地では、甘しょはもっとも適した作物として、恐らく江戸中期以降他の九州各地と同様広く作られるようになったと思われるが、甘しょは食用とされるばかりでなく、昭和期以降は相当量がでん粉に、また生切り干しに加工されるようになりました。

しかし、昭和40年頃の高度成長期を境として、甘しょをはじめ陸稲などは次第に作られなくなり、かわって山林を拓くなどしてミカンが植えられ、加えて馬鈴しょ作、酪農が盛んとなりました。また、この地は雲仙・小浜に湧く豊かな温泉と、雲仙岳に代表される景観に恵まれ、わが国でもっとも早く昭和9年（1934）に国立公園に指定され、雲仙には年間75万人、小浜温泉には30万人が訪れ、観光は農漁とならぶ、この町の一大産業となってい

ます。

この町の経営耕地面積は509ヘクタール(1990)、粗生産額は24.1億円で、作目別の比率はコメ7.5% (以下同)、野菜10.4、いも類58.1、畜産17.4、その他6.6、となっていますが、甘しょ作が激減していますので、馬鈴しょ作がこの町の農業生産の基幹となっていることが伺えます。

町の南西部に位置する山畑地区は、旧北串山村の中心地で、この町でもっとも馬鈴しょの栽培が盛んです。毎年青果用で940,000% (10 kgダンボール)、種子用として33,000袋(1袋20kg)が生産され、県内外に出荷されて好評を得ています。

馬鈴しょには、特有の生理上の問題があり、また、病害虫も多く、栽培にあたっては、これらに適切な対策を施すことが必要ですが、それにはまず、すぐれた種いもを使うことがあげられます。この地区でも、馬鈴しょの生産が盛んになると併行して種いも生産も行われ、生産物は広く西南暖地で用いられています。

県の種馬鈴しょ生産販売については、大正9年(1920)長崎県農会が直接販売に携わり、昭和5年(1930)には県農会の指導により、北串山村のある南高来郡を含む地域をまとめた馬鈴薯同業組合が設けられ、さらに戦後植物防疫法の施行により県の馬鈴しょ採種町村に馬鈴薯採種組合が相次いで設けられましたが、同28年にはこれらの各組合が協力して事業にあたるため長崎県馬鈴薯採種組合連合会が結成されました。

この地区の、種馬鈴しょ生産者でつくられる小浜町馬鈴薯採種組合は、平成14年(2002)創立50周年を迎えましたが、今日に至るまでの道は決して平坦ではなく、絶えざる創意工

夫と努力の積み重ねであって、関係された方々の感慨はいかばかりであろうか、とお察します。

長崎県は、北海道に次ぐわが国第二の馬鈴しょ生産地ですが、暖地馬鈴しょの先進地として主導的役割を果たしてきた、小浜町組合を含む同県馬鈴しょの、これまでの道のりをふりかえてみることにします。

・ 導入から明治・大正期まで

長崎県は、わが国にはじめて馬鈴しょが導入された地として有名ですが、伝えられてからかなりの期間は決してその価値が高く認められず、救荒作物的に細々と栽培が続けられたと思われます。それでも江戸時代の後期には、渡来する外国船に生鮮食糧として供給したとの記録があり、かなりの量が生産されていたことが伺えますが、暖かい地方で、しかも種いもを更新することなく栽培が続けられてきたことには、携わった人たちの、たいへんな苦労があったものとのべれます。

どのくらいの面積に作られていたか、については、江戸時代には、はっきりした記録がなく、明治16年(1883)には20.9町(同ヘクタール)となっていて、同22年には247.3町と、わずか6年の間に10倍に伸びていますが、外国人の往来が頻繁になったこと、いままでとは異った食事の内容が少しずつ取り入れられることによって消費が増え、それに伴って生産も増加したのでしょうか。その後栽培面積は増加の一途をたどり、大正5年(1916)には1,199.9町と1,000ヘクタールを超え、昭和初年頃には2,000町歩以上となっています。

同県の馬鈴しょ作は、北海道などの冷涼地帯のそれと異なり、春秋両季に生産されるのが大きな特徴ですが、それでも気象条件から

みると春の方が作りやすく、秋は植付ける種
いの確保が難しいうえ技術的な問題も多く、
生育の適期も短かく、容易ではありません。
が、それでも海外への輸出用とされたことが、
秋作が興隆する大きな要因であった、と考え
られます。県産の馬鈴しょは、とくに東南アジ
ア方面で好評で、これら地域に多く送られる
ようになりましたが、輸出はすでに明治初年
からはじまり、同30年代後半(1905,6年頃)か
ら著しく増加していることは注目に値します。

なお、県での単位面積あたり収量は、大正
中期(1917,8年頃)から昭和年代に至るまで、
常に全国平均を上まわっていて、すでに馬鈴
しょ先進県としての面目躍如たるものがあり
ました。

・ 昭和期以降

昭和10年代の戦時下では、馬鈴しょも統制
品に加えられ、輸出は減少し、したがって秋
作は少なくなり春作が増えましたが、食糧事
情が厳しくなるのにあわせ、馬鈴しょは準主
食的に扱われるようになり、とくに戦後は全
国的に貴重な主食となっています。

昭和20年(1945)には、ほぼ3,000ヘクタ
ールであった馬鈴しょは、その後、一時減少
するものの、同35年頃からふたたび増加の傾
向をみせ、同40年には6,250ヘクタール、
同50年には7,420ヘクタールとなっています。
とくに秋作産のものは競合する産地がない
ため、青果物として高く評価され、また30
年代より春秋両季作に適する優良品種が次
々と育成されたことが大きな要因と考えら
れますが、加えて昭和40年頃以降の経済成
長に伴って野菜・果樹生産、畜産業が伸び、
それに反して穀類、いも類、マメ類などが
次第に少なくなっていたため、県の馬鈴しょ
生産地でも甘しょ、



小浜町の段々畑

陸稲その他従来から作られてきた作物が減少
し、その分有利な馬鈴しょが増えてきました。

昭和50年代に入ると、農産物の輸送体制も
逐次整い、発達し、それとともに大産地では
長期間保存する施設も整備され、市場への馬
鈴しょの出荷も、初秋から次年の春まで主産
地の北海道から供給され、長崎県ほか暖地の
秋作産のものと競合するようになりました。
一般秋作産の、11月末から12月にかけて収穫
されるものがこれにあたりますが、秋作の作
期をずらし、北海道産のものの量が少なく、
また品質的にもやや落ちてくる春頃に収穫、
出荷できるようにすれば、重複しないわけで、
ここに12月から次年の1月頃に植える、いわ
ゆる冬作馬鈴しょが次第に増加し、それと
ともに普通の秋作は減少してゆきます。

一方、かつて盛んであった輸出は、統制撤
廃後の昭和25年(1950)から再開され、同36
～40年頃までは多かったのですが、昭和47
年以降は激減しています。これは東南アジア
方面へオランダ、エジプトなどからの輸出が
増え、これらが品質がよく、価格も安定して
いることに影響されていますが、この点も秋
作が減少する要因の一つともいえます。

・ 新品種の育成と種馬鈴しょの生産

県で栽培された品種は、昭和10年(1935)頃

には「長崎赤」がほぼ半分を占め、その他「長崎白」「長崎黄」「男爵薯」などの在来品種が作られていましたが、戦後は春秋両季作が容易な「農林1号」が多く作られるようになり、これによって長崎県をはじめとする西南暖地の馬鈴しょ作、とくに秋作は安定するようになりました。

昭和25年に、現在の県総合農林試験場愛野馬鈴薯支場の前身である佐賀農事改良実験所長崎試験地（翌年長崎県農業試験場愛野試験地と改称）が南高来郡愛野町に設けられて以来、「ウンゼン」「タチバナ」「シマバラ」「チヂワ」「デジマ」「ニシユタカ」「メイホウ」「アイノアカ」など、新品種が次々と育成されましたが、秋作で多収が得られる「タチバナ」が昭和30、40年代に広く普及し、その後品質のよい「デジマ」、多収の「ニシユタカ」の両黄肉品種がこれにかわって、現在の主力品種となっています。

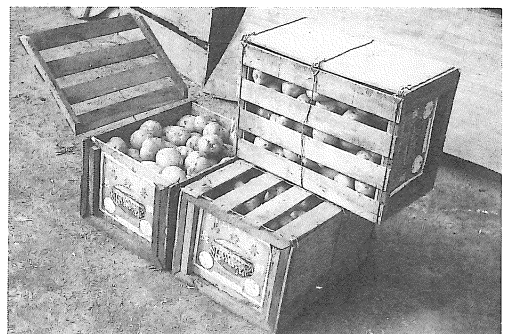
なお、年末から次年のはじめにかけて植えられる冬作用の種いもとしては、同県産のものは生理上の問題で用いられず、冷涼地産の「メークイン」「農林1号」、一部「男爵薯」が用いられています。

すぐれた種いもを用いることは、馬鈴しょ作安定のうえでもっとも重要ですが、現在のように種馬鈴しょの生産体制が整っていなかった昔でも、県産の馬鈴しょはウイルス病に罹ることが少なく、暖地で馬鈴しょが広く作られるようになったとき、種いもとして出荷されています。これは長崎県の生産地が海沿いにあるアブラムシの発生が少ないことによると考えられます。

しかし、馬鈴しょ栽培が全国的に増加するにしたがって、種いもがもととなって発生す

るウイルス罹病が多くなり、この対策を施さなければならなくなって、昭和10年（1935）農林省は馬鈴しょ原種の増殖配布事業に対し助成を行い、長崎県では県農事試験場で原種を生産し配布していますが、この体制は戦後の植物防疫法が施行されるまで続いています。次いで昭和16年、種馬鈴しょの検査が義務づけられ、県の農産物検査所による生産品の検査、市町村農会長によるほ場管理検査が行われるようになりました。

戦後の昭和22年（1947）、重要な作物、食糧である馬鈴しょ増産のために必要な優良種いもの生産基地として、国立の馬鈴薯原原種農場が全国7カ所に設立されましたが、これらはすべて冷涼高冷地帯に設けられ、長崎県のような春秋両季作地域、とくに秋作用の種いも増殖の面では、かならずしもその効果を十分に発揮できず、県では原種農場を設けて両季作用種いも増殖をはかる一方、秋作用原原種農場の新設を要望しましたが、昭和35年（1960）に婦恋馬鈴薯原原種農場秋作部が南高来郡瑞穂村（のち町）に設けられ、同39年に雲仙馬鈴薯原原種農場（現独立行政法人種苗管理センター雲仙農場）として独立し、ここに春秋二期作用種馬鈴しょの生産、供給体制が確立し、今日に至っています。



昭和30年代の種馬鈴しょ荷姿

「よい結果を得たい者は、よい種子を用いよ」とは、古来の言い伝えですが、とくに馬鈴しょの場合にそれがいえます。これからも小浜町組合をはじめ、県の各採種組合から優れた種いもが供給され、長崎県ばかりでなく、全国の暖地馬鈴しょの生産が安定し、ますます興隆されますことを願ってやみません。

★

宅島豊喜前組合長を悼む

小浜町馬鈴薯採種組合長であり、長崎県種馬鈴薯協会会長、日本種馬鈴薯協会理事の宅島豊喜様は、平成14年10月14日急逝されました。ここに謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。



宅島様は、旧北串山村のご出身で、温厚篤実、常に熱意をもって事に当たられ、懇切な指導のもと多くの後進を育てられ、父上とともに長年地域の、また県の馬鈴しょ、種馬鈴しょ振興事業に盡くされ、その足跡はまさに現代長崎の“いも”の歴史そのものであります。

江戸、明治、大正の時代を経て、先人の努力により興隆の歩を着実に進めてきた県の馬鈴しょ産業は、戦中戦後の食糧事情悪化期、経済の復興・成長期から、現在の食の多様化、国民の健康・栄養への関心の高まりの時期を迎え、ますますその声価を高めつつありますが、ここに至るまでの道のりは、決して平坦なものではありませんでした。

馬鈴しょは、環境に対してきわめて適応性があり、日本のどこでも、また世界のいたるところで作られますが、反面生理上、病害虫防除上その他の点で、たいへん問題の多い作物でもあります。宅島様は自らその豊かな体

験と高い見識・洞察力をもって率先範を垂れ、これらに地道に着実に対応され、その結果として長崎県の馬鈴しょが今日の地位を築いたと申しても、決して過言ではありません。

作物生産は、しかし決して長期の安定はなく、常にさまざまな障害がおこっており、ためにそれを解決する技術の進歩がありますが、馬鈴しょも例外ではなく、むしろ平穩に過ぎる年はない、といってもよいほどです。平成10年、宅島様は長崎県種馬鈴薯協会会長、日本種馬鈴薯協会理事の要職に就任され、これから先、県、国の種馬鈴しょ事業への一層の指導、助言がいただけるものと、大いに期待されたところですが、思いがけずも急逝されましたことは、たいへん悲しいことであり、甚大な痛手であります。

私どもは、常々宅島様のご薫陶によりえまして“いも”への接し方を忠実に遂行して、県産馬鈴しょ、種馬鈴しょの名声を今後とも守り続けてゆくことが、宅島様からいただきました御恩に報いる道と心得、これからも精進してまいりたいと思っております。

宅島豊喜氏略歴

北串山村馬鈴薯採種組合設立（発起人）	昭和26.7.
小浜町馬鈴薯採種組合 副組合長	昭32.6.～昭51.3.
小浜町馬鈴薯採種組合 組合長	昭51.4.～
長崎県種馬鈴薯協会 理事	昭51.7.～平10.7.
長崎県種馬鈴薯協会 会長	平10.8.～
種馬鈴薯検査員	昭26.7.～昭40.3.
植物防疫補助員	昭40.4.～昭52.3.
北串農業協同組合 理事	昭35.6.～昭41.6.
日本種馬鈴薯協会 理事	平11.11.～

農林大臣感謝状（種馬鈴薯検査員としての功績） 昭35.10.
緑白綬有功章（大日本農会：優良農業者） 昭57.11.